

ゼミにおける実践的研究

—スペイン語劇を通した

パフォーマンス分析の現場から—

小阪知弘

南山大学外国語学部准教授

私はスペイン文学、特に近現代スペイン演劇と比較文学を研究対象としている。同時に、私は世界文学の観点からスペイン文学の諸相を俯瞰しようと日々試みている。ここでは、私が担当する3、4年生対象科目である演習(ゼミナール)を紹介する。

ゼミナールを運営するにあたり、私は二方向性の研究姿勢に基づいて講義を展開させている。第一に、小阪ゼミではスペイン語で書かれたテキスト分析をおこなう。日本語訳がある場合はスペイン語の原典と日本語版を対照させ、物語内に配されている記号やシンボルの解析をおこな

うことで、テキストの深部に潜在する隠れた次元を学生たちと発見する知的営為を進展させていくのである。また、

ひとつのスペイン語テキストに複数の日本語訳がある場合は、それらの日本語訳を原文と照らし合わせて、意味論的差異に注目した考察も取り入れている。

第二に、私のゼミではパフォーマンス研究の観点から、スペイン語で書かれた劇テキストを実際に舞台にのせる実践的研究をおこなっている。具体的には、ゼミ生を中心として、毎年12月に上演しているスペイン語劇の朗読会をおこなっている。詳細には、舞台を彩る小道具を選定し、俳優を決めると同時に、照明係、音響係そして字幕係など技術スタッフを選び、集団的知的作業を媒介として、書かれたテキストをパフォーマンスの次元へと詩的に移し替えていくわけである。随時、講義中にスペイン語による発音指導、演技指導をおこない、演劇における「場」の感覚も学生たちと共に掴んでいく。南山大学にはログスセンターという名称を持つ小劇場が存在しており、同劇場においてスペイン語劇の上演をおこなうため、この板張りの劇場空間でリハーサルを含めた稽古を繰り返し、舞台づくりを学んでいくのである。

発音指導に関しては、腹式呼吸を取り入れた発声練習をおこない、自らの身体を楽器に見立て、舞台上から観客

に声が届くように訓練する。スペイン語は英語と同様、「tr」や「pl」のような二重子音を内包した語彙が多く存在するため、二重子音で構成された単語などの発音練習を重点的におこなって、スペイン語母語話者の発音に近い発話がおこなえるよう練習を重ねていく。スペイン語は強母音と弱母音で織りなされた律動的な言語であるため、ラテンダンスの初歩的なステップを学びながら、ゼミ生たちは同言語の律動感を体得していくことになる。

また、同ゼミでは実際の稽古を通して芝居で用いられる十字架や剣、羽根ペン、杖、そして椅子などの小道具に内在する象徴的意味を解説していく。照明についても、情熱的な場面では赤色の照明を強調し、夢の場面では青色の照明だけを限定的に使用するなど、色のシンボリズムを基調とした舞台を組み立てていく。

同時に、舞台上における俳優たちの水平の動きと垂直の動きの交差やひとつの台詞を活かすための「間」の取り方、そして、音風景に合わせた身体表現の詩的展開を実地で学びながら、「動く絵画」としてのスペイン語劇の力動的様相を立体的に把握していくのである。

このように、私は学生たちと共に、パフォーマンス研究

を通して、スペイン文学を洞察する実践的研究を日々進展させている。



ゼミ生を中心としたスペイン語劇の上演風景(2019)